

# 集団的文化活動におけるコミュニケーションの意味

生涯教育計画コース 張 智 恩

The meaning of communication in cultural group activity

Jieun JANG

Japan had 17,819 Kouminkan in 1996. The Kouminkan had been the education center to solve the real life problems of people in the community. However, the Kouminkan has been changing its character as an institute where people can gather and participate in various activities and interact with others. This is due to the improvement of other educational media such as computers, televisions and specialty books and the affluence of living conditions since the growth of the Japanese economy. We can say that this phenomenon reflects the demand that people desire communication with others during leisure time.

On the basis of this recognition, this article suggests the style and character of communication in cultural group activities during leisure time. For the proposition, this article investigates the theories of communication that are based on the hermeneutic and social approach, like those of Stella. Thing-Toomey, Edward T.Hall, and George H. Mead. In addition, this article investigates the meaning of activities in the same way that Hannah Arendt discussed from the view point of communication.

## 目 次

## 0. はじめに

### はじめに

- I. 余暇におけるコミュニケーションへの要求
  - A. 現代の余暇状況
  - B. コミュニケーションへの要求
  - C. 先行研究
- II. コミュニケーション研究の方法論
  - A. 解釈的接近の必要性
  - B. 社会的接近の意味
- III. コミュニケーション行為における他者
  - A. 自己漏出の存在
  - B. 文化の内容としての他者
  - C. 模倣の対象としての他者
- IV. 集団的文化活動における他者とのコミュニケーションの意味
  - A. 注意深さと相互学習
  - B. 純粋な共同性の回復

### おわりに

本稿は成人教育の主なる機関である公民館において余暇活動の一環として行なわれる文化活動団体が増大している中で、その集団活動における個人が余暇を実現する方法としてコミュニケーションのありかたを考察する。

特にこの論稿は余暇における集団活動の現場を見る認識の基礎を整えるという次元で、コミュニケーションの理論を紹介する。しかし、議論の方法としては普遍的で客観的なコミュニケーションの様態や過程を再び確認することではなく、個人を多様な文化とものかたりをもっている、知覚の対象となる他者として規定し、異文化の他者たちが相互学習と親和的交流の共同性を構築していくコミュニケーションの志向的ありかたを考察するところに特徴がある。

この論文における展開はまず、現代社会の余暇における人々のコミュニケーションへの要求を確認するとともに地域の公民館において行われる交流的余暇活動の実状を検討する。そして社会教育研究におけるコミュニケーションについての既存の方向性を確認する。その上、コミュニケーションを研究する解釈的、社会的接近の立場にたち、Hannah.Arendt, Stella.Ting Toomey, Edward

T.Hall, George H.Meadの議論を中心とし、親和的交流と相互学習が可能なコミュニケーションのありかたとその前提としての文化についての考察を行なう。その際、内容の展開はコミュニケーション研究の方法論の検討、コミュニケーションにおける他者の意味、そして集団活動における相互学習のためのコミュニケーションのありかた、そして総括にあたるおわりの順にする。

## I. 余暇におけるコミュニケーションへの要求

### A. 現代の余暇状況

『レジャー白書94』によると日本人のレジャーにおける動向が10年を周期にし、変わりつつある。1963年からの高度成長時代に伴う大量生産及び消費、観光基本法の制定、海外旅行の自由化とともに、1964年の東京オリンピックをきっかけにしたスポーツの広がり等により、レジャーは大衆化してきた。しかし1973年のオイルショックを契機に「安、近、短」傾向が言われ、いわゆる健康のスポーツのブームやカルチャーセンターなどを中心とした文化的活動という新しい余暇の芽が広がる。しかし1983年から始まる10年間、バブル経済に乗り、レジャーにおける情報機器の導入と開発が活発になるとともに、1987年のリゾート法の制定により高費用型のレジャー産業が全盛となった。さらにこのような余暇産業の成長と多様化とともに時短が急増してきたため、人々の意識においても変化が見られた。<sup>1)</sup>

1973年と1993年度に余暇開発センターがおこなった調査を参考すると日本人の生き方において余暇と関連して意味ある変化を見ることができる。要するに、一生懸命努力する克己型が減り、やすらかな気持ちを重視する受容型と人生は楽しむためにあると思う享楽型が増加したのである。<sup>2)</sup> それとともに、同機関の1987年の調査を参考すると友人及び知人あるいは家族との交流を志向する交流型、身心の安らぎ、日常生活からの解放感、自然とのふれあいなどを志向する休養志向型の増加が高まることを理解できる。<sup>3)</sup> 1993年の調査においても今後の余暇活動として選考する項目が友人及び知人との付き合い、健康づくり、そして家族旅行などにおいて高く現れた。<sup>4)</sup>

このようなレジャー白書の情報は80年代以降の人々の意識において余暇に対する認識が変化・増加していることを反映する。<sup>5)</sup> そしてこのような意識の変化において読み取れることは人々がある有用性のため、時間的手段として余暇を利用し、あるいは余暇に有意義なことをおこなった結果として余暇時間の意義を事後規定する傾向が減少していることである。これを余暇社会学者、新津

晃一が分類する余暇概念に照らし、解釈すると人々は単なる“時間概念としての余暇”，あるいは個人や社会における余暇の機能からその意味を規定する“活動概念としての余暇”から脱皮し、余暇における存在自体が心身の安らぎと充実感の過程となる、いわゆる“意識概念としての余暇”へ移動していることであるといえよう。<sup>6)</sup>

### B. コミュニケーションへの要求

上記の1993年の調査にも見られるような人々が余暇において楽しさ、悦び、充実感を感じたいという願望が家族をはじめとする友人及び知人のような他者との交流を通じて現れる点は特徴的である。このような意識は現代の都市の余暇産業において見られる消費的・発散的・仮想的形態の余暇行動とは対照的なものとして、人々が仕事及び義務のような課題の領域における交流とは異なるコミュニケーションを余暇に期待するものであると見られ、人々との絆の形成ができる相互作用の場づくりにある程度、意識的な努力をする傾向であると理解できる。そのため、その期待と要求に符合する新たな相互作用が勃興できる活動の場とコミュニケーションの様式を提起することは緊急の課題であろう。

ところで都市型の余暇活動を離れ、地方の地域に行ってみると交流型の団体が多様に存在する。いわゆる地域の公民館を中心とし、展開されている文化、スポーツ活動を基盤とした多様な団体である。埼玉県だけをしらべても1996年現在、556館の公民館がある。<sup>7)</sup> それぞれの公民館には音楽の集い、様々な語学教室、無踊、盆栽、陶芸、料理教室、短歌、編物、スポーツなど多様な文化活動の団体がある。このようなサークル形態の文化活動は内部的にはボランティアとして指導者の役割をするメンバーを中心としておこなう定期的活動と親睦会・小発表会の時間を持ち、外部的には公民館における文化際、あるいは市規模の連盟音楽祭、体育際を通じ、日ごろの活動を発表し、活動における質と連帯を深める場合が少なくない。このような団体活動のメンバーはアマチュアとして活動における技術と教養をともに身につけながら、10年以上、一緒に過ごしてきた仲間の基盤を持つ場合が多い。地域の公民館にはこのように活動と交流が活発であり、自主的な団体が何十種類以上登録している実状がある。

公民館は戦後、1946年、寺中作雄の構想により、国おこし、地域づくりの拠点として市町村を中心とし、設置され、1996年現在17,819館<sup>8)</sup>が存在して小学校数と中学校数の中間に位置する日本の代表的な公的成人教育センターである。<sup>9)</sup>しかし、その性格は戦後から高度成長期を

経る過程においておもに特徴付けられた生活課題解決型にとどまらず、80年代以降余暇及び文化の時代に入って趣味、他者との交流そして生きがいなども幅広く含む機関になりつつある。さらに、多様な教育機能を持つ媒体の発達生活要求の解決に有用な情報を効果的に提供するため、公民館は新たな性格を模索しなければならない状況で公民館無用論も語られている。しかし地域の公民館では人々の要求の変化に対応できる環境が自主的な文化活動団体を中心とし、既に造成されている。彼らにとって公民館は生活課題や要求に直接結びつかなくても活動を通じ、他者と自分を理解し、交流を維持できる居場所になっているためである。昭和63年度の埼玉県における公民館の実態調査資料によると、公民館の利用者数は、図書館利用者数である497,169人の3倍以上にあたる14,435,891人に達している。<sup>10)</sup> 公民館が地域の人々を集め得る理由は何よりも他者との交流ができる活動の機会を提供し、さらにある特定の活動の価値と技術の中دةともに自分を鍛えて行くという同一性を付与することによって、異質的な他者が交流するに寄与するためである。

### C. 先行研究

社会教育におけるコミュニケーションについての理論研究は比較的新しい領域に属するが、コミュニケーションが影響を及ぼすものとしての生活世界及、意識化そして公共性のような社会教育の課題と関連され、部分的に考察されつつある。ハーバーマスのコミュニケーション理論展開の跡付けを通し、柳沢昌一はシステムによる生活世界の植民地化の問題と回復の課題に対面し、相互主体の一対話的な次元を構築する実践と生活世界的省察を提起する。<sup>11)</sup> 一方、松岡廣路によるフレイレの対話論の批判的検討においては意識化の方法としての対話を二つの次元で考察し、二項対立図式を基盤とする相互主体の関係としての「対話」より、物象化される以前の一元的关系としての「対話」において意識化が達成されることを言う。<sup>12)</sup> そして宮坂広作は、社会教育におけるより高次の開かれた共同性＝公共性への創造への展望を助言とか指導といった外在的人間関係ではなく、共感的交流によって人間の絆を生み出すプロセスに見出している。<sup>13)</sup> このような議論が共通に持っている認識はありのままの他者及び自分が認められ、人間的交流が可能なコミュニケーションへの志向であると言えよう。そのような交流と関係認識への配慮はコミュニケーションがもっている語源にも当たる「一致」が実現される心通いを想定したものであろう。<sup>14)</sup>

一方、調査や事例研究としては高齢者の感覚障害における難聴者の方が視覚の不自由な方より、コミュニケーション障害が大きいというところを取り上げ、難聴者の方がコミュニケーション機会の縮小によって社会的孤立になりやすいということを提起したものが出ている。<sup>15)</sup> そして大島まなによってカナダのストーリーテリングの実践が紹介されている。現代人がメディアの発達によって、聞き手の立場になることが多いがその場合、メッセージを送る側とのコミュニケーションを必ず伴うものではない反面、語り手が聞き手の反応から、そして聞き手全体の出す空気から、次の展開への流れをつかみとるストーリーテリングは、人間関係を根幹としたダイナミックなコミュニケーション過程を持つ文化活動として紹介されている。<sup>16)</sup> そして、植木とみ子によって家族間コミュニケーションの再構築のために英国のNMGCの事例が紹介されている。家族を援助するシステムとして公的援助は、住居、教育、医療など生活の基本となるところの福祉サービスを重点項目とし、その他の様々なソフト面でのサービスは、幅広いボランティア活動に支えられた民間の援助機関が主として実施しているが、その中のひとつがNMGCである。ところで、植木のNMGCの報告によると、様々な職業と階層に属するクライアントのほとんどが抱えている主たる問題は言葉の上でも又肉体的にも、コミュニケーションの方法に関する無知であり、そのため、コミュニケーションの図り方、他者の態度の理解など人間関係教育の持つ重要性が再び取り上げられている点である。<sup>17)</sup>

コミュニケーションの理論研究や事例研究はそれぞれ、コミュニケーションの必要性和方向性、そして方法論を呈示している。特にコミュニケーションの障害は社会的孤立を生み出し、円滑なコミュニケーションができない当事者のため、周りの人々にもネガティブな影響を与え、共同の生活の場に危機をもたらす側面も考察されている。そのため、現実における様々な内的・外的葛藤が実は必要なコミュニケーション及びその円滑なプロセスの不在から起因するケースが多いといえる。

ところがコミュニケーションに関わる状況と個人は様々であるため、技術的接近によるコミュニケーションの展開もある程度効果があろうが、上記の著者が言う共感的交流は真実に理解されておられ、受け入れておられるような感覚の上で成立するものであるため、人格的関係の成立がコミュニケーションの前提として必要となると言えよう。要するに他者への理解と尊重により自然に自分を表現できる場としての条件が具備される必要がある。そして、このような人格的な対面はなによりも他者

をどういふ存在として見るかという認識と関わらざるを得ない。そのため、本稿は既存の研究の方向性をより深化するという意味で、人格的交流を可能にするコミュニケーションの成立に必要な前提としてコミュニケーションにおける他者の意味を中心にし、考察していく。

## Ⅱ. コミュニケーション研究の方法論

### A. 解釈的接近の必要性

コミュニケーションについての実質的な方法論を模索する中で James A. Anderson は客観的経験主義と解釈的経験主義を区分する。<sup>19)</sup> 自然科学の研究においてよく使われている客観的経験主義は意志が実現される局地的な面において人間生活に対する効果的説明をする際、限界をもつため、Anderson はコミュニケーションの把握における解釈的経験主義の接近の必要性を提起する。

Anderson によると客観的経験主義における特別な仮説と一般原理の関係は実験を通じ、理論的なルールの適用によって維持される。そのため、現状の世界の共通領域における一般化できる仮説と予測性を持つ原理的な知識を生産することが目的になる。このような方法論は心理学や社会学において適用されるものとして主に個人の属性的モデルの研究に見られるものであり、1つの領域における効果的な原理がほかのすべての領域においても効果的であるという科学の統一性に基づくものである。しかし、このような観点は機能的・合計的・平均的な代表によって処理されたデータに依存するため、ある知識が主張される独特な側面をみることができない限界を持つ<sup>19)</sup>。

反面、ポストモダンとともに浮き堀りになった解釈的経験主義は存在 (presence) に特権を与える。存在の特権というのは適切な場としてそして同時に分析の対象として生活世界を観ることであり、さらに解釈のために必要となる“あそこ (there)”に参加 (participation) することを含む。参加は engagement の持続と複合性によってある特性を獲得する。解釈的経験主義においてわれわれがいるあそこ (there) というのは物理的場所というより意味の交差点である。解釈的経験主義はイデオロギーや意味 (meaning) の領域に位置付けられるため、実在 (reality) を観察するというより、実在を構築することである。そのため研究される実在は物理的基盤より、観念的な基盤から重視され、物質とエネルギーの次元で捉えられるより意味と重要性の観点から接近させられるのである。そのため、説明の対象となる実在は構築されたものであり、物質を意味化し、意味を物質化する

ものである。このような解釈的理論には集合的実在と局地的な実践とのあいだに緊張がある。そしてその緊張の意味が何であれ、実在の構築は必ず、コミュニケーションを通じておこなわれる<sup>20)</sup>。

さらに、解釈的経験主義は働きかけ (agency) を受容し、分析における主観性と歴史性を大事にする。歴史であるということは過去のことを意味するのではなく正体化した行動として特別な時期と特別な空間で起こることを意味する。解釈的経験主義における研究者は、人間行動は単なる観察より解釈を要求する象徴的表現であることを受容する。そのため、人間行動の意味は人間の成就として理解され、働きかける (agents) ものとしての行動者の主観性と解釈者の主観性の上で意味付けられるものとして把握される<sup>21)</sup>。

以上の Anderson の議論によると、解釈的経験主義における人間は客観的経験主義がおこなうようなデータ化され得る属性的な孤立した存在ではなく、自我が他者と関連して創り出す社会的実在を通じて理解される存在であるといえよう。個人が現れる特別で、歴史的で、関係的な社会の過程の脈絡で個人のアイデンティティを理解しようとする観点である。このような観点はある動機及び願望により、過去になかった社会的実在を構築するためある活動を媒介にし、集まった集団における相互作用を解釈する場合、役立つ視点となり得ると言えよう。

### B. 社会的接近の意味

上記の Anderson が言う人間行動を研究する方法論は異文化間における個人間のコミュニケーションの方法論を提起した Stella Ting-Toomey と William B. Gudykunst が言う議論にも類似している。

Ting-toomey と Gudykunst は文化の研究を emic と etic の二つの接近として説明する。emic は内部 (inside) の文化を研究するものとしてその文化のメンバーとして文化を理解することであり、人類学的、社会言語学的、speaking model の ethnography (記述的人種学) に基礎する方法論である。反面、etic は比較的な文化の観点にたち、外部から文化を理解することに焦点を当てる。社会学的・心理学的な研究が etic に属するものであり、コミュニケーション研究の領域においては異文化間のコミュニケーション行動における普遍的な類似性と差異性を説明する次元にあたる。たとえば、個人主義と集団主義がいかなる社会においても現れる類似性と差異性を説明するのは etic 的方法であるが、その差異が個人間の相互作用において現れる多様な意味を把握するのは emic 的なものであるといえよう。<sup>22)</sup>

ところで、emicとeticは両方とも人間を研究する立場において分節された個の集合としてあるいは年齢、性、学歴のような属性から要因間の関係のみをみるのではなく、個が行動という働きによりお互いに影響を与え、うける現状として人間生活を捉えるという面で社会的接近の観点を踏まえている。このような社会的観点が持つ意義と特性はWendy Leeds-Hurwitの議論を通じてより正確に理解できる。

社会的接近における社会的実在は客観的経験主義において議論されたように人間行動に優先し、あらかじめ存在する事実のセットではなく人間の相互作用を通じ、創造されたもの、あるいは成就されたものを意味する。そのため、われわれの行動、言葉、そのほかのシンボルを通じ、我々の世界としての社会的実在が創造されると言う信念が前提となる。Leeds Hurwitはこのような社会的接近を機械的、伝達的、科学的方法に対して有機的、儀式的、解釈的なものとして特徴づける。Leeds-Hurwitによると社会的接近は人間が行為を通じ、社会的意味を造り出す方法を研究することであり、他者との相互作用におけるその過程が持つ意味に焦点を当て、社会的実在が維持、構築、変化される象徴的過程として人間の協同的行為であるコミュニケーションを研究する。<sup>23)</sup>

上記のそれぞれの方法論はコミュニケーションを人間が社会的世界を形成していく有意義なる行動としてみなしているところに共通点がある。特に解釈的接近、emic的接近、社会的接近からのコミュニケーションの研究は個人に有意義な内的・外的世界を増進させる社会的関係を形成する方法としてのコミュニケーションを見ることであり、ある程度志向性を持つコミュニケーションのありかたを模索するものであるといえよう。このような視点にたち、コミュニケーションの対象となる他者の意味と円滑なる相互作用ができるコミュニケーションにおける個人の意識について考察してみる。以下はHannah.Arendt ET.Hall, G.H.Mead, Stella. Ting toomeyの議論を参考に展開する。

### Ⅲ. コミュニケーション行為における他者

#### A. 自己漏出の存在

Arendtは著書『人間の条件：The Human Condition』において、労働と仕事とは異なる人間の活動の特性を提起する。要するに、人間の行為が生命過程の維持に必須不可欠に連結して食べ、働き、休み、消費するという循環過程をなしているか、それとも不死のものを追及しながら世界を創出していくかを見出している。Arendtが

言う活動の世界は労働においてのように、必要によって強制されたものでもなく仕事のように有用性によって促されたものでもない。<sup>24)</sup> それは私たちが関わろうと思う他人の存在によって刺激され、我々を人間世界の中に挿入するものとして言論の役割が重要視され、世界において自己を漏出するようになる必然性を持つ活動の世界である。<sup>25)</sup>

Arendtは主に政治的活動の領域においてこの言論の特性を取り上げているが、議論の性格から考えるとArendtの言論の概念は人間が目的的に活動に取り組む世界において他者とのコミュニケーション行為を通じ、世界を構築していく相互作用として理解できる。Arendtは“人間の行為は、活動の場合ほど言論を必要としない”というが、この場合の言論は伝達的手段という副次的役割を指すのではなく、活動とともに“自分がだれであるかを示し、そのユニークな人格のアイデンティティを積極的に明らかにし、こうして人間世界にその姿を表す”ものとして捉えられている。<sup>26)</sup> Arendtは“行為において行為者を暴露しなければ、活動はその特殊な性格を失い、なによりもまず功績の一形態になり、仕事における製作が対象物を作る手段であるように目的のための手段”に過ぎなくなることを指摘し、正体、他者と異なるアイデンティティを暴露しない活動は無意味であることを述べる。<sup>27)</sup>

#### B. 文化の内容としての他者

一方、Hallは著書『沈黙の言葉』において“文化をコミュニケーション”とみなす。すなわち“話すことではなくて人々が行なうこと、並びに人々を支配している隠れた規範について”“自分があらわにしているとは思われない事を実際は他人に伝えている”ことを意味するが、このような見方は知覚の対象となる他者がその人を形成している文化の内容として把握され得る点を合意する。<sup>28)</sup> Hallは、文化は、我々のすべてがその中で形成され、知らぬうちにわれわれの日常生活を規制しているものとして単なる習慣以上のものであり、自由に取りかえることのできるものではないと言う。<sup>29)</sup> さらに、文化による決定的な影響の殆どは人間の意識の外にあり、個人がどれほど意識的に操作しようとしても出来ない側面があるため、コミュニケーションの知覚されない側面について理解する必要があると述べる。<sup>30)</sup>

このようなHallの議論を参考するとコミュニケーションにおける知覚の対象となる他者は自ら自覚している文化だけではなく、知覚していない文化も、無意識のレベルにおいて表わしているため、コミュニケーションの対

象として他者を知覚する際、注意深さが要求される。Hallは人間の意識と行為を形成している文化を三つの側面すなわち、公式的なものと非公式的なものそして技術的なものから説明する。

公式的な文化は身につける際、人々は正しいもの、当然あるべきものの存在を意識することにより、公式的なものを知覚することである。このようなある特定の公式的な体系が強固になっていくにつれてそれ以外の行動様式が不自然なものと考えられるようになる。<sup>31)</sup> 誰もが公式的文化に本能のように依存している。反面、非公式的な文化は知覚の欠如にその特性がある。非公式なものを構成するものはわれわれがかつて習得したがもはや日常生活の一部になりきってしまい、自動的に行なわれる行動や身のこなしである。そのため、これらの非公式的な活動がどの程度まで生活に浸透しているかを知覚しないことが文化を異にする集団間、個人間のあいだのコミュニケーションに多くの困難を現に引き起こすことになる。<sup>32)</sup> 一方、技術的なものの特徴は高度に意識された行動であり、感情が抑制されている点である。感情が入りこんでくると技術的なものは旨く機能しなくなる。すべてが旨く行かなくなった際には、人々が頼りにするのは、技術的なものである。<sup>33)</sup>

### C. 模倣の対象としての他者

Meadは著書『精神・自我・社会—社会的行動主義者の立場から』において模倣のメカニズムを通じ、個人の意識に影響を及ぼす他者の意味を説明している。Meadは模倣が起こる前提として二つの個体の中にある類似な傾向があると仮定する。<sup>34)</sup> この場合、模倣は他人のやっていることを見てそれをそのまま行なうという意味ではない。寧ろ、個人が彼自身の中に、他人の中に引き起こす反応を呼び起こし、共通の基礎にたつ行動をし、そのため彼自身の刺激に対しても他の人々が反応するように反応していることを意味する。<sup>35)</sup> そのため、模倣における思考とコミュニケーションは他人の役割を取り入れ、他人が遂行しているのと同じ過程に参加し、そのような参加に関わらせて自分の行動をコントロールする行為として現れる。<sup>36)</sup>

Meadは人間の社会過程における個人の動作による相互適応はコミュニケーションを通して行なわれると述べる。そしてこのような適応の中心的要素を“意味”として規定し、“ある一定の人間の身振りとその身振りによって他の人間に指示されるものとしてはじめの人間の身振りの後に続く行動との関係領域に発生し、そこに存在するものである”と定義する。<sup>37)</sup> そのため、意味は社

会的動作に対して心的につけ加えられるものではなく反応との関連で与えられ、発達することを理解できる。生物体の他の生物体の身振りへの適応的な反応は、前者による後者の身振りの解釈であるため、Meadは人々の精神、自我および自我意識の存在と発展は、他者との相互作用の過程の進行に依存していると述べる。<sup>38)</sup>

Meadの議論を通してコミュニケーションを考えると、コミュニケーションにおける他者は社会的適応を課題にしている個人に対して、自分の要求を知覚させる刺激と鏡となり、模倣のメカニズムを通じ、社会的に自分を理解する契機を与える存在として把握できる。そのため、上記のArendt, HallとともにMeadの議論における人間も、活動を行なう社会的過程において自分の正体を様々な形態で漏出し、その漏出を契機にし、明示的あるいは暗黙的に影響を及ぼす他者との相互作用を発生させる。特に人間が持続的に共同性を維持していく社会的過程において相互作用に対面する個体とその対象は表面的な異質性と内的同質性あるいは表面的同質性と内的異質性を含んでいるため、程度の差があるがアイデンティティの特定な部分においては異文化の他者としての可能性を含んでいる。そのため、集団活動において知覚と漏出が円滑な相互作用を共有できるコミュニケーションのありかたが考察されるべきであるといえよう。

## IV. 集団的文化活動における他者とのコミュニケーションの意味

### A. 注意深さと相互学習

Ting-Toomeyは、人間は性・年齢・社会階層・肉体的能力等の属性的なものや行動・感情・思考・自己イメージ等、形成の結果としての文化的なものにおいて多様に存在することを指摘する。このような多様性の前提の上に立ち、Ting-Toomeyは他者たちの認識と評価は我々の自意識やわれわれに対する見解に強く影響を及ぼすため、お互いにどうアイデンティティを形成してきたか、さらにどうアイデンティティされたいかに注意しなければならないという。<sup>39)</sup> Ting-Toomeyはこのようなコミュニケーションの態度を指し、注意深さ(Mindfulness)<sup>40)</sup>と呼ぶが、この概念はある程度異質性をもつ集団における個人間(Interpersonal)のコミュニケーションの研究にも適用され得る点が多いと考える。Ting-Toomeyは注意深さに対して他者が彼ら自身をどう規定しているかに対して敏感になることであり、理解され、尊敬され、支持されるという感情を励ますことであると規定する。<sup>41)</sup> さらにこの注意深さにおいて、コミュニケーションをす

る人は、基礎的現状を解釈する際、典型的に存在する多数のパースペクティブに敏感になる必要があると指摘する。<sup>42)</sup>

又、Ting-Toomeyは成人教育学において言われる相互学習のような観点を持ち、我々の異なる他者との出会いは思考や日常的な生活様式に対して疑問をもち、異なるものをわかることにより、もう1つの世界をわかることになるという意味づける。しかしそれとともに、このように新しい仮定を持つことにより、日常的な考え方を延期し、異なる見方から物を見ようとする注意深いコミュニケーションは、忍耐心、献身、実践を必要とするものであると述べる。<sup>43)</sup>

Ting Toomeyと同じ脈絡でHallも“生に対する関心は、異質なものに触れて自分のものといかに対照的に異なっているかを痛感したときにはじめて我々を捉えるものなのである”と言う。<sup>44)</sup> そのため、Hallは、あることがらを強調したいとき、ほかの多くの事柄を犠牲にするという文化の特性を踏まえ、公式的な文化の体系を理解し、非公式的文化を意識の段階にまで引き上げることを提起する。<sup>45)</sup> さらに、“己れを習う上のもっとも効果的な方法の1つは他者の文化を、身を入れて意識的に学ぶことである”というがこれはMeadが言う他者の役割を借り、自分の中の要求を理解することと共通する面があると言えよう。<sup>46)</sup>

ところで、Ting-ToomeyとHallが個人や集団が持つ文化の異質性を自明なものとして前提した上で、コミュニケーションにおける異質性に対する理解と学びを強調した反面、Meadは個人が個体間における同質性を追求する際、コミュニケーションを通じ、共通の適応の方法を発達させることを指摘したといえよう。二つの議論は異質性と同質性をめぐって適応と共存のためにどういう働きが個人の内部から意識的に発現されるかを論じたと言えよう。しかし、Arendtの場合は、このような適応と有意義な共存の目的に符合する直接的な相互作用より、個人の反応発生に刺激となる他者の正体が自然に、正確に現れ得る円滑なるコミュニケーションの場の性格とそのため必要となる意識を提起している。

## B. 純粋な共同性の回復

Arendtは、コミュニケーション的行為において個人の正体（この論考においてはアイデンティティと本然の姿という意味として使っているが訳書には正体として表記してある）をあらわす暴露は“ある意図的な目的として行なうことは殆ど不可能である”という。なぜならば、人が自分の特質を所有し、それを自由に処理するの

と同じ仕方での正体を扱うことはできなく、さらに他人には現れる正体が本人の目には隠されたままになっているためである。そして言論と活動の暴露的特質は人々が他人の犠牲になったり、他人に敵意を持ったりする場合ではなく純粋に人間的共同性に置かれている場合、前面に出てくることを指摘する。そのため、行為において行為者を暴露しなければ活動はその特殊な性格を失い、功績の一形態になり、その場合目的のための手段に過ぎないことを述べる。そのため、Arendtの議論における活動は行為とともにその行為者を暴露するという固有の傾向を持つことによって純粋な活動に至るといえよう。<sup>47)</sup>

ところで、Arendtは労働及び仕事と異なる活動は、活動が始まる過程において不可逆性と不可予見性があるため、これに対する救済策がある時こそ、自由な活動が始まるといい、許しと約束の概念を持ってその救済の可能性を説明する。“自分の行なう行為から生じる結果から解放され、許されることが無ければ、我々の活動能力はいわば、1つの行為に限定され”、“1つの行為のために回復できなくなる”とのことである。<sup>48)</sup> “人々は、自分が行なう行為から絶えず相互に解放されることによるのみ、自由な行為者に留まる”ことができ、“再び出発点に戻る”ことになるという面で我々は他人に依存していることを言う。<sup>49)</sup>

そして許しとともに“約束の実行に拘束されることが無ければ、自分のアイデンティティを維持することができなくなり…矛盾と曖昧さの中にとらわれてしまう”と言う。<sup>50)</sup> この約束の能力はArendtの議論において、人間の弱さ、すなわち、自分に頼ることができない側面と未来に頼ることができない側面に対して支払う代償として、他人によってそのリアリティが保障されるという面で他人との共生の悦びに対する代償でもある。<sup>51)</sup> Arendtは許しと約束の能力はともに多数性に依存し、他人の存在に依存するものとして製作による世界の所有が独居においても可能なこととは異なる活動の特徴として意味付ける。<sup>52)</sup>

このような共同性の中で約束と許しの能力を持って自分と他者を守る社会的関係は神によって許されることを望むならば、そのまえにお互いに許し合わなければならないという聖書の御言葉にも見られるように共同性を追求する上で必要となる相互作用の原理であると言えよう。

## おわりに

この論考は最近余暇活動の一環として増大している集

团的文化活動を把握する視点からコミュニケーションのありかたを検討した。方法論においては個人が持つコミュニケーション行動が構築する社会的実在に焦点を当て、コミュニケーション行為を解釈する立場をとった。その際、集団間、個人間の相互作用を見る視点の基礎を、属性及び形成における多様さを持つアイデンティティにおき、コミュニケーションを他者の文化の理解と学びの視点から把握した。

この過程においてお互いに異なる文化をもつ個人が日常の活動世界においてその正体と関連し、もつ異質性及び同質性がコミュニケーション行為を通じ、現れる多様な様相を確認した。さらに様々な人間の異質性と多少の同質性を理解しない場合、集団活動はいつも葛藤を曝す必然性を含むため、異文化の背景を持っている個人間には相互作用を促進させるコミュニケーションのありかたが必要であることを Ting-Toomey・Hall・Arendt の議論によって提起した。上記の議論を通してこの論文でとりあげたのは一つ目は注意深さであり、二つ目は集団内における純粋な共同性の具備であり、三つ目は自分と他者を守る許しと約束の能力であった。

人間が余暇活動において追求するものは序論においても確認されたように多くの人々の場合、他者との交流、コミュニケーションである。そしてその余暇活動の中でも文化活動を選ぶことはある価値体系を持った文化を学ぶという面で向上心が反映される動機としてみなされ得る。余暇活動の一環として集団的文化活動を行なう団体におけるメンバーは活動を通じ、もとめる文化的価値における同一性を持つ反面、様々な文化的背景とものかたまりを持つ異質のメンバーである。このような同質性と異質性がどのように融和していくかは今後より深く研究される課題であると考えられる。しかし地域における多数の人々に開かれた文化活動団体は、多様なメンバーの有意義な活動と交流を支援するためにある程度、コミュニケーションのあり方を備える必要があると思う。この論稿はそのような親和的であり、同時に相互形成に寄与するコミュニケーションの方法に対する試論的考察であると言えよう。

(佐藤一子)

## 注

- 1) 余暇開発センター編、『レジャー白書94』文栄社, 1994, pp.75-76
- 2) Ibid, pp.78-81
- 3) Ibid, pp.82-83
- 4) Ibid, pp.94-96
- 5) Ibid, p.76
- 6) 新津晃一, “余暇論の系譜” <松原治郎編『余暇社会学』, 垣内出版, 1986, pp.274-284
- 7) 文部省『社会教育調査報告書』1996, 大蔵省印刷局発行, p.31
- 8) Ibid, p.30
- 9) 鈴木真理 “公民館の現実” 碓井正久, 倉内史郎編著『新社会教育』, 学文社, 1986, p.146
- 10) 埼玉県公民館連合会編『埼玉の公民館』, 信陽堂, 1989, p.554
- 11) 柳沢昌一 “生活世界とコミュニケーション的行為の理論” —J, ハーバーマスの理論展開の後付けを通して— <叢書, 生涯学習X, 社会教育基礎理論研究会編著『生活世界の対話的創造』, 雄松堂出版, 1992> pp.26-27
- 12) 松岡廣路 “フレイレ識字過程における「対話」概念の批判的検討” <東京大学社会教育学研究室編『社会教育学・図書館学研究』第16号, 1993>, p.80
- 13) 宮坂広作『現代日本の社会教育 課題と展望』明石書店, 1987, pp.36-37
- 14) 中里克治 “社会からの断絶によるコミュニケーション障害—老人の視点から—” <教育と医学の会編『教育と医学』1990年6月号, 慶応通信発行> p.87
- 15) Ibid., pp.90-91
- 16) 大島まな “カナダのストーリーテリングと社会教育—複合文化コミュニケーションにおけるコミュニケーション過程としてのストーリーテリングの視座から—” <日本社会教育学会編, 日本の社会教育第31集『社会教育の国際的動向』, 東洋館出版社, 1987> pp.111-112.
- 17) 植木とみ子 “家族間コミュニケーションの再構築—英国 NMGC の事例—” <日本社会教育学会編, 日本の社会教育32集『現代家族と社会教育』, 東洋館出版社, 1988> pp.124-126
- 18) James A.Anderson “Communication Theory” The Guilford press New York, 1996. p.129
- 19) Ibid, pp.129-133
- 20) Ibid, pp.133-138
- 21) Ibid, pp.135-136
- 22) William B.Gudykunst, Stella Ting-Toomey, Tsukasa Nishida. “Communication in Personal Relationships across Culture” SAGE Publications, 1996. pp.7-14
- 23) Wendy Leeds-Hurwit “Social Approache to Communication” The Guilford Press, 1995 pp.4-10
- 24) Hannah Arendt 『人間の条件』 [The Human Condition : The University of Chicago Press, 1958] 志水速雄訳, pp.32-35, pp.157-166
- 25) Ibid, p.288
- 26) Ibid, pp.291-292
- 27) Ibid, pp.293-294

- 28) Edward T.Hall『沈黙の言葉』[The Silent Language : Doubleday and Company New York, 1959] 國弘正雄他・長井善見・斎藤美津子訳, p.54
- 29) Ibid, pp.43-50
- 30) Ibid, pp.49-50
- 31) Ibid, pp.94-108
- 32) Ibid, pp.101-105
- 33) Ibid, pp.102-106
- 34) GH. Mead『精神・自我・社会—社会的行動主義者の立場から』[Mind, Self, and Society : From the Standpoint of a Social Behaviorist : The University of Chicago Press, 1934] 稲葉三千男, 滝沢正樹, 中野収訳, pp.64-69
- 35) Ibid, pp.73-76
- 36) Ibid, p.81
- 37) Ibid, p.83
- 38) Ibid, pp.84-88
- 39) Stella Ting-Toomey “Communication across Cultures” the Guilford Press New York. 1999. pp.6-7
- 40) Ibid, p.16
- 41) Ibid, pp.7-8
- 42) Ibid, pp.45-46
- 43) Ibid, p. 8
- 44) Hall, 前掲書 (1959), p.51
- 45) Ibid, p.109, p.169
- 46) Ibid, p.53
- 47) Arendt, 前掲書, pp.292-295
- 48) Ibid, p.372
- 49) Ibid, p.376
- 50) Ibid, p.372
- 51) Ibid, p.381
- 52) Ibid, p.372
- The University of Chicago Press, 1958] 志水速雄訳
- 9) Edward T.Hall『沈黙の言葉』[The Silent Language : Doubleday and Company New York, 1959] 國弘正雄他・長井善見・斎藤美津子訳
- 10) George H. Mead『精神・自我・社会—社会的行動主義者の立場から』[Mind, Self, and Society : From the Standpoint of a Social Behaviorist : The University of Chicago Press, 1934] 稲葉三千男, 滝沢正樹, 中野収訳
- 11) Stella Ting-Toomey “Communication Across Cultures” the Guilford Press New York. 1999.
- 12) 文部省『社会教育調査報告書』, 大蔵省印刷局発行, 1996
- 13) 柳沢昌一 “生活世界とコミュニケーション的行為の理論—J, ハーバースの理論展開の後付けを通して—” 生涯学習X, 社会教育基礎理論研究会編著『生活世界の対話的創造』, 雄松堂出版, 1992)
- 14) 松岡廣路 “フレイレ識字過程における「対話」概念の批判的検討” (東京大学社会教育学研究室編『社会教育学・図書館学研究』第16号, 1993)
- 15) 宮坂広作『現代日本の社会教育—課題と展望』明石書店, 1978
- 16) 中里克治 “社会からの断絶によるコミュニケーション障害—老人の視点から—” (教育と医学の会編『教育と医学』1990年6月号, 慶応通信発行)
- 17) 大島まな “カナダのストーリーテリングと社会教育—複合文化コミュニケーションにおけるコミュニケーション過程としてのストーリーテリングの視座から—” (日本社会教育学会編, 日本の社会教育第31集『社会教育の国際的動向』, 東洋館出版社, 1987)
- 18) 植木とみ子 “家族間コミュニケーションの再構築—英国 NMGC の事例—” (日本社会教育学編, 日本の社会教育32集『現代家族と社会教育』, 東洋館出版社

## 引用文献

- 1) 余暇開発センター編, 『レジャー白書94』, 文栄社, 1994
- 2) 新津晃一, “余暇論の系譜” (松原治郎編『余暇社会学』, 垣内出版, 1986
- 3) 鈴木真理 “公民館の現実” 碓井正久, 倉内史郎編著『新社会教育』, 学文社, 1986
- 4) 埼玉県公民館連合会編『埼玉の公民館』, 信陽堂, 1989
- 5) James A.Anderson “Communication Theory” The Guilford press New York, 1996.
- 6) William B.Gudykunst, Stella Ting-Toomey, Tsukasa Nishida. “Communication in Personal Relationships across Culture” SAGE Publications,1996.
- 7) Wendy Leeds-Hurwit “Social Approache to Communication” The Guilford Press, 1995
- 8) Hannah Arendt『人間の条件』[The Human Condition :